



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大植物園所蔵ブラキストン標本の受入過程とその現状
Author(s)	加藤, 克; 市川, 秀雄
Citation	北大植物園研究紀要, 2, 1-24
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32808
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_p1-24.pdf



北大植物園所蔵ブラキストン標本の受入過程とその現状

加藤 克・市川 秀雄

はじめに

本稿は、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（以下北大植物園¹と略）所蔵ブラキストン採集鳥類標本の目録を作成するにあたり、より正確な標本情報を付与するために標本の皆悉調査を実施し、それにより明らかとした、標本がブラキストンから開拓使に寄贈されてから北大植物園にまとめられるまでの過程を報告するものである。あわせて、その受入過程の中で混入したと考えられる標本群について紹介し、ブラキストン標本の現状についても報告したい。

1. ブラキストンとブラキストン標本

1.1 ブラキストンとブラキストン標本

ブラキストン（Thomas Wright Blakiston）の生涯やその果たした役割については、すでに多くの文献によって紹介されており、詳細については参考文献を参照いただきたい。ここでは、1863（文久3）年から1883（明治16）年まで函館に居留し、様々な事業を営むかたわら、福士成豊、プライヤー（H. Pryer）、スノー（H. J. Snow）らと協力して日本産鳥類を採集し、それにまつわる目録や論文を発表し、津軽海峡に動物分布上の境界線（ブラキストン線）があることを明らかにした英国人であることを確認しておく。

ブラキストンは収集した鳥類標本を当初、イギリス及びアメリカの博物館に寄贈することとしていたが、海難による標本紛失を避けるべく開拓使に寄贈し、開拓使の函館仮博物館に展示・保管することとした。その後、開拓使の廃止にともない仮博物館は函館県、北海道庁、函館区へとその管轄が変更され、仮博物館は1881（明治24）年には函館商業学校附属の商品陳列場となった。その後、同校廃止にともないブラキストン標本は分散して保管されることとなったが、1908（明治41）年に東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）教授で、博物館の主任でもあった八田三郎によって改めてまとめられ、現在にいたるまで保管されている。

以上がブラキストン標本のアウトラインというべきものであるが、しかしながら、現時点において次のような問題点が存在していることに注意しなければならない。

- ・ブラキストンが寄贈した年次とその点数、標本群の分散の過程、北大植物園が受入れた標本点数の情報に、報告によって異同が見受けられること
- ・ブラキストン寄贈点数は諸文献において、最大で1338点と考えられている。また1932年に標本目録が作成され、1331点²が確認されたにもかかわらず、2001年における北大植物園の資料台帳には疑問符付の標本を含めて1345点²がブラキストン標本として登録されており、それらの標本データから見てもブラキストンの寄贈した以外の鳥類標本が多数含まれていると考えられること

ブラキストン標本を個別の鳥類標本として考えた場合、その受入過程などについての情報はそれほど重要ではないかもしれないが、この標本群が動物学上に果たした役割を考えるならば、すでに歴史的資料としての価値をも有していることは明らかである。このような価値を有する以上、単品としての標本管理だけでなく、標本群の受入過程、保管状況などの情報を明確にし、混入した標本を除外するなど、標本群としての管理を実施すべきであろう。その管理のためには、改めて標本群について検討しなおさなければならない。次節以降において、上記の問題点について考察を進める。

1.2 ブラキストンによる標本寄贈時期とその点数

ブラキストンが開拓使に鳥類標本を寄贈した時期及びその点数については次の史料が知られている。第一は北海道立文書館所蔵開拓使簿書群であり、これらには1879(明治12)年5月に1314点を寄贈したという記載がある³。第二は『開拓使事業報告』⁴の1880(明治13)年1月に1338点を寄贈したという記載である。ブラキストンに関する報告の多くは後者の記事に基づいている⁵が、前者について詳細に検討した関他(1990)は後者の記載を誤りとする。編纂物の記載である後者の記事よりも一次史料である前者の記事を重視すべきであることはいままでもなく、函館仮博物館開場時の新聞記事などからも前者の情報がより信憑性が高いが、現存のブラキストン標本と考えられるもののうち、採集時期が1880年以降であるものが100点を越しており、両者ともに検討を要する。

関他(1990)が引用する、1879年の開拓使の寄贈依頼に対するブラキストンの承諾書には「右鳥類貴廳博物館江今般贈呈可致候ニ付テハ福士氏或ハ拙者兩名之内當道ニ在留中ハ右鳥類修正方或ハ交換等可致権力ヲ御許可與相成度候⁶」とあり、1879年に寄贈した後に追加・差換えなどが行われたことが予想される。寄贈の開始時期を1879年とし、その点数が1314点であったとしても、寄贈という行為がその時点で終了したわけではない可能性がある。対して、『開拓使事業報告』に見る1880年1月1338点寄贈という記事であるが、『函館新聞』1880(明治13)年1月31日付記事に、「本港在留英商トウマス、ブレキストン氏が多年の間に集めたる剥製の鳥類千三百三十八羽を當仮博物館へ寄贈したる事は予て本誌に掲載したりしが、今度開拓長官より右の報酬として北海道実測図を贈与せられたり」とある。『開拓使事業報告』の寄贈日は寄贈開始日ではないものの、1880年1月までに小規模な追加・差し替えが実施されて寄贈が一段落し、開拓使による謝礼の時点で1338点が寄贈されていたという事実を記載したものである可能性は否定できない。寄贈という言葉の解釈については慎重にならねばならないが、前者と同様に、ある特定の時期の状態を示す史料として『開拓使事業報告』の記事も検討の価値を有するものであろう。

追加、差換えがいつまでどのように実施されていたかについて明らかとする資料は管見の限りでは見出せず、既述したように1880年以降採集の標本が相当数残されていることから、ブラキストンの離日までにはかなりの標本が追加されたものと考えられる。最終的な寄贈点数は1338点を大きく超えていた可能性もあるが、はっきりしたことはわからない。

次に、ブラキストン標本がどのような過程を経て北海道大学に移管されたか、またその際の標本点数について触れられている報告を年度順にあげる。

谷津(1908)

東北帝国大学農科大学動物学教授八田三郎氏は(略)ブラキストンの標本を此度皆同博物館⁷にて保管する事となり、同標本は貴重なるにも係らず従来は函館博物館内に蔵しあり、其より同館廃止の際総計千百五十二の内庁立函館中学校へ九百八十九、札幌中学校へ七十五、北海道師範学校へ八十九と分配して保管しありしを此度相合併したる(後略)

山階他(1932)

Near the end of his stay these specimens including 1338 individuals were presented to the Kaitakushi in 1880. The collection was first kept in the small local museum in Hakodate and later some part was removed to the new museum in Sapporo 1881. The specimens in Hakodate were given over to the Hakodate commercial school in 1890 but after the abolition of the school in 1895 they were divided into three to be given to the Hakodate middle school, the Sapporo middle school and the Sapporo agricultural college. In 1908 they were again all gathered in the college and since then they have been kept in the college museum (now the University Museum).⁸

The collection consists in 1331 individuals covering 255 forms. Unfortunately some of the original specimens were lost when they were sent to some exhibition held in Tokyo. They were replaced by new ones which are indicated in the list with a date of collection later than 1885.⁹

芳賀（1958）

ブラキストンは明治十三年開拓使に一三三八点の剥製を日本在住の記念として寄贈した。この標本ははじめ函館博物館に保管されたが、明治二十三年に函館商業学校に移管になり、明治二十八年同校の廃校によって札幌農学校、函館中学校、札幌中学校の三校に配分保存された。その後八田三郎教授の努力により、明治四十一年九月に（ママ）ブランスキン鳥類標本全部を北大博物館に移管保存するようになった。

この他、北海道大学農学部博物館発行のパンフレット（1975 頃～）、森（1986）などもほぼ同様の内容であり、犬飼の記載に基づいて記載されているものと考えられる。

弥永（1979）

（前略）鳥・獣類の剥製三百二十四種千三百三十八点を寄贈したものである。標本は最初は開拓使所管の函館博物館に所蔵されたが、道庁になって函館区に払い下げられ、函館商業学校へ移管された。（略）明治二十八年、一部を函館中学校に残し、他は札幌中学校（現、札幌南高等学校）と札幌農学校へ分散されたが、札幌農学校の八田三郎教授は（略）標本全部を東北帝国大学農科大学に集めた。これが現在北海道大学農学部附属博物館に、ブラキストンが寄贈したときより七点だけ少ない千三百三十一点が保管されているのである。

やや煩雑になったので、整理してみよう。

谷津：函館中学校（989 点）、札幌中学校（75 点）、北海道師範学校（89 点）の 1152 点（合算すると 1153 点になる）。山階他：ブラキストン寄贈 1338 点のうち、1881 年に札幌の博物館に一部が移管され、残りは 1895 年に函館中学校、札幌中学校、札幌農学校に分散された。1908 年にまとめられた際に 255 種 1331 点が確認された（目録の記載点数を合計すると 1342 点、標本点数 1 点に対して、採集地データが 2 通り記載されているものもあり、さらに追加される可能性もある）。

芳賀・弥永：函館中学校、札幌中学校、札幌農学校に分散していたものが 1908 年にまとめられ、1331 点が確認された。

1932 年に山階・犬飼らによって目録が作成されて以降は、標本の皆悉調査は実施されていないものと思われ、それ以降の標本点数はおそらく目録に従って記載されているものと考えられる。また、目録に記された札幌農学校・札幌中学校・函館中学校への分散という記載もそれ以降の報告類と共通しているが、谷津によれば札幌中学校・函館中学校・北海道師範学校への分散ということになっており、また点数も 1150 点あまりとそれ以降の標本点数に比べ、著しく少ないものとなっている。この点についてどのように考えるべきであろうか。

まず、標本点数の増加についてであるが、『札幌農学校所属博物館採集日記』¹⁰（以下『採集日記』と略）から、「明治 33 年 12 月 27 日受入 ブラキストン氏採集 函館中学校より保管換（転換）」という記載を有する標本が 136 点存在したことが知られる。この明治 33（1900）年は八田三郎が札幌農学校に赴任する前のことであり、この標本群については八田の業績を紹介する谷津の報告に含まれなかった可能性が高い。この 136 点を谷津の紹介した 1150 点あまりに加えると約 1300 点となり、標本点数の増加の理由とみなしうる。

次に、分散した標本の保管先の混乱について検討する。標本が函館中学校から移管されたことは「函館中学校の保管に係るブラキストン氏採集鳥類標本は今回道庁の命令に依り札幌帝国農科大学内へ保管することとなり、去る十日同地を発送せりと¹¹」という新聞記事から確認される。次に、札幌中学校、北海道師範学校、札幌農学校の問題であるが、一部の標本のラベルには「札中」、「北師」と記されたものがある。「札中」の記載を有するものは 70 点、「北師」の記載を有するものは 84 点あり、谷津の述べる札幌中学校 75 点、北海道師範学校 89 点にほぼ合致する。この記載がいつ、誰によって実施されたかについては検討しなければならないとしても、より年代の近い谷津の記載と合致することから考えて、分散して保管されていた施設は札幌中学校及び北海道師範学校とみなしてよかろう。それではなぜ犬飼は北海道師範学校ではなく札幌農学校としたのだろうか。

犬飼が 1932 年に報告した際の情報源は八田三郎、函館図書館長岡田健蔵、河野常吉の三氏から受け継いだ史料が中心

である(犬飼,1943)。犬飼が利用したと考えられる史料のうち、市立函館図書館に現在も保管されている「ブラキストン廿年祭関係資料¹²⁾」に次のような記事がある。

二十八年同校(函館商業学校:引用者注)廃せられて中学校を開かるゝに及び博物史学の参考品は農科札中函中の三校に分與せられ¹³⁾

この史料に基づいて、犬飼は函館商業学校から分散した先は札幌農学校、札幌中学校、函館中学校としたものと推測される。1900年の時点で、札幌農学校には標本群の一部が移管されており、分散先と考えることもあながち間違いではないが、函館商業学校の廃校の時点で移管されたわけではなく、この新聞記事は正確なものとはいえない。犬飼が1932年に標本群を調査した際に、ラベルの「北師」「札中」という記載を確認したか否かを判断する手段はないが、1932年以降には「北師」という情報がないものとされたにもかかわらず、改めてラベルに記載したとは考えづらく、犬飼は「北師」を札幌農学校と考えたものと推測される。なお、河野から受け継いだとされる史料は、関他(1990)に記載されているもの¹⁴⁾と推測されるが、現時点では閲覧の機会に恵まれていない。また、犬飼が八田から受け継いだとされる史料がどのようなものであるのかは現時点では不明である。

犬飼の記述を否定するには根拠が乏しいことは否めないが、標本の分散先については現存する標本のラベル情報と移管された時期により近い谷津の記載を信頼すべきと考える。

次に、犬飼の「later some part was removed to the new museum in Sapporo 1881」という記載である。札幌仮博物場(現北大植物園内博物館)の新築に合わせたと考えられる、開拓使内管理資料の移動であるが、それを明らかにする資料は見出せない。先に標本点数の増加について検討した際に触れた136点に含まれるものと考えられる標本群には、後述するように札幌農学校所属博物館のラベルが付与されており、「ブ氏採集」という記載がある。このラベルには函館中学校から移管されたという『採集日記』に見る情報はまったく記載されていない。『採集日記』は大正初年頃にはその役割を終えており、犬飼が博物館スタッフとなった昭和初期には利用されていなかったものと推測されることから、犬飼はこの標本群をもって、八田の収集にかかわる東北帝国大学農科大学時代ではなく、明治初期の札幌農学校時代にはすでにブラキストン標本の一部が保管されていたとみなしていた可能性がある。また、この標本群の他にも札幌農学校所属博物館時代のラベルが付与されているものも存在しており、これらを農学校時代に移管された標本群とみなしていた可能性もある。しかし、この二つの標本群は後述するように1881年に移管されたものとは考えられないので、犬飼がどの標本をもって1881年に移管されたものであるとしたのか不明である。

やや推測を重ねてしまった部分はあるが、ここまでの考察をまとめよう。

ブラキストンは1879(明治12)年5月に、北海道開拓使の依頼に応じて1314点の鳥類標本を開拓使所管の函館仮博物場に寄贈したが、それは最終的なものではなく、それ以降においても標本の追加及び差換えが実施されていた。1880年1月の段階で1338点となっていたと推測されるが、その後においても標本の追加及び差換えは行われていた。

標本群は函館仮博物場の移管により、1890年に函館商業学校の管理下に入ったが、その廃校にともない1895年頃にその後身である函館中学校及び札幌中学校、北海道師範学校に分割されて保管されることになった。その後、1900年12月に函館中学校所蔵の標本群のうち、136点が北大植物園(札幌農学校所属博物館)に移管され、4ヶ所に分割されて保管されることになった。1908年に東北帝国大学農科大学教授八田三郎によって函館中学校、札幌中学校、北海道師範学校に保管されていた1150点あまりが北大植物園(札幌博物館)にまとめられた。ここで、以前から所蔵していた136点を加えて標本数は1300点弱となり、これが1908年時点でのブラキストン標本の全容と考えられる。この統合の上で八田三郎によって「ブラキストン標本¹⁵⁾」の印がラベルに押されたものと考えられる。

1932年に山階・犬飼・名取によって、ブラキストン標本の目録が作成され、その時点で1331点が確認された。この目録に従い、標本群は管理されることとなったが、30点あまりの標本点数の増加及び目録に記載された標本数の合計の相違については検討を要する。その後、2001年に改めて確認したところ、標本点数は1345点となっており、さらに増加している。

文献及び史料類から明らかとなる事柄は以上であるが、これが妥当であるか否か、また混入していると考えられる標本はいつ・どのように混入したのか、明らかとしない点が多い。次章以降で、現在保管されている標本を通じ

てその検討を行う。

2. ブラキストン標本付属のラベル

2.1 ブラキストン標本付属ラベル

北大植物園所蔵ブラキストン標本には、大まかに分類して 8 種類のラベルが付属している。それらのラベルには様々な記載があり、また受入れの過程によって生じたと考えられる付属状況の差異も見受けられる。それぞれのラベルを付与した存在、付与された時期を明確にすることで、それぞれの標本が函館仮博物館からどのような経路を通して、北大植物園に収蔵されることになったか、あわせてどのラベルがブラキストンの寄贈した標本としてのメルクマールとなるのか明らかとしたい。この調査により、混入していると考えられる標本を除外することも可能となろう。本章においては付属するラベルを種類ごとに考察し、そのラベルの有する歴史を明らかとしてゆく。

2.2 ラベル 1

ラベル 1 (写真 1) ¹⁶は現在も北大植物園の博物標本管理分野で利用しているラベルであり、昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて利用され始めたものである。このラベルは現在利用している標本台帳に登録するために付与されたもので、ブラキストン標本とされる標本群においては記載事項は標本番号のみであり、種名や採集データなどは記載されていない。ブラキストン標本とされている 1343 点（所在不明 2 点を除く）すべてにこのラベルが付属している。

2.3 ラベル 2 及びラベル 3

ラベル 2 (写真 2) は表面に管理用と考えられる数字、採集地・採集日・計測値などのデータが英語表記でなされている。裏面には同内容のデータが日本語表記で記載されているものもあるが、すべてに記載されているわけではなく、表面が主となるものと考えられる。計測値は「C (センチ)」単位で記載されているものもあれば、「インツ (インチ)」単位で記載されているものもあり、必ずしも同一人物によって記載されたわけではないようであるが、記載方法はほぼ共通しており、ある特定の意図に基づいて作成されたものである。

ラベル 3 (写真 3) はラベル 2 を短くしたような形で、記載内容もラベル 2 表面に見られる英語表記がなされているが、裏面に見る日本語表記が 1 枚もない点が違いとしてあげられる。

以上のような特徴を有するラベル 2 及びラベル 3 は次のような理由から、同一の存在によって付与されたラベルであると考えられる。第一に、ラベル 2 の付属する標本 979 点にはラベル 3 が付属しておらず、逆にラベル 3 の付属する 194 点にはラベル 2 は付属していない¹⁷。第二に、ラベル 2 に記載されている管理番号は、最も若いもので 1001 であり 2698 まで欠番はありつつも連続して付与されている。なお、この他に 2800 番台を持つものが 5 点 (2884・2885・2887・2889・2890) ある。対してラベル 3 の管理番号は、最も若いもので 2725 であり、3217 まで同様に連続している¹⁸。この連続性から考えて、ラベル 2 の利用後、ラベル 3 を利用するようになったものと考えて間違いない。ラベル 2 の 2800 番台の番号は現存するラベル 3 では欠番となっており、またこの 5 点の数字がごくまとまっていることから、残されていたラベル 2 を再利用したものと考えてよいだろう。以上の点から、ラベル 2 及びラベル 3 は英語によるデータ記載を行った人物（あるいはグループ）によって付与された一連のラベルとみなしてよいものと考ええる。

それでは、このラベルはいかなる人物によって作成・付与されたものであろうか。まず、計測値が記載されていることに注目すると、剥製が製作されてから計測することは困難であり、採集者によってラベルが付与されたものか、あるいは採集者のデータに基づいてラベルを後に付与したものと考えなければならない。そこで、次の表を見ていただきたい。

(表 1) ラベル 2・3 付属標本の採集年代

	1864	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881	1882	1883
1000	2		7											
1100														
1200														
1300			1	1	3									
1400		1		1	27	1								

1500			50	1								
1600			49	4								
1700		1	21	28								
1800			2	50	1							
1900				27	15							
2000				1	56							
2100					22	39						
2200						58						
2300						69	1					
2400						85						
2500					5	5	30					
2600							23	7				
2700							(2)		(6)			
2800								1	4(1)	(23)		
2900										(21)		
3000										(11)		
3100										(35)		
3200											(1)	

この表は、ラベル2・ラベル3が付属する標本を、先に見た管理番号に基づいて1000番台から100番刻みで分類し、そこから採集年次が記載されている標本を抽出し、その年次ごとの点数を一覧にしたものである(括弧内の数値はラベル3付属の点数)。管理番号は採集の年代に従って付与されていることは明らかであるが、必ずしも採集年次の順番に整理して若い管理番号を付与したというわけではなく、採集地ごとにとまとめて管理番号が付与される傾向をもっている¹⁹。管理番号は採集データよりも後に記載されており、剥製の製作あるいは収集協力者からの入手の後、管理登録の順に番号が付与されたものと考えらるべきであろう。このような管理を実施した存在はグラキストン以外には考えづらく、これらのラベルはグラキストンあるいはその協力者である富士成豊を含むグループによって付与されたものと考えてよい。ハリオア・ツツバメ【3166】に付属するラベルは標本の脚部をまとめてしぼるのにも利用されており、剥製製作・管理登録の際に付与されたという考えを裏付ける。

この点については、国立科学博物館に所蔵されている富士家寄贈の鳥類標本を調査する機会に恵まれ、ラベル2及びラベル3の存在を確認することができた。ラベル2が付属していたものは4点あり、ヤマガラ²⁰(1877年4月15日採集)、アカショウビ²¹(1879年6月23日採集)、ヒヨドリ²²(1881年2月13日採集)、ムクドリ²³(1881年4月5日採集)(写真4)²⁴になる。対してラベル3が付属していたものは1881年以降採集のもので、1900年代に至るまでラベル3と同様のものが利用されていた(写真5)²⁵。様式がまったく同じものであること、1881年前後に利用ラベルの変更が実施されたという共通点から考えても、北大植物園所蔵グラキストン標本に付属しているラベル2及びラベル3は富士成豊によって付与されたものであるとみなすことができる。なお、国立科学博物館所蔵標本には先に見た管理番号が記載されていないことから、ラベルの付与は富士成豊が、管理登録はグラキストンが実施していたものと考えられる。

以上の考察から、ラベル2あるいはラベル3のいずれかが付属している1172点の標本はグラキストンによって寄贈された資料であると考えよう。

2.4 ラベル4

ラベル4(写真6)は1343点中1212点(紐やラベルの断片が存在していて、付属していたと考えられるものを含む)に付属している。記載事項がわかるものは1197点で、2から1314までの数字が重複することなく連続して付与されている。この1314という数字は先に見た、1879年1月の開拓使への寄贈の点数と合致し、最初の寄贈の際に付与されていたものであるように思われる。しかし、次の表を見ていただきたい。

(表 2) ラベル 4 付属標本の採集年代

	1864	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881	1882	1883	1884	1885～
1			1		10	4	15	17	1	1	1	13	1			1
100					9	8	4	14	5				4			
200					4	9	3	28	6				12			
300			1	1	8	3	3	13	4			2	25			1
400					8	7	3	18	8			2	5			
500				1	4	9	1	43	2				4			
600				1	6	11	3	37	1			1	5			
700			1		8	5	4	21	8	2			3			
800	2	1			27	14	4	8	2			1	6			
900					31	9	14	17	6	1			2			
1000					17	6	17	8	3			2	4			
1100			3		11	16	7	6	4	5			1			
1200			2		3	6	15	1	2			2	7			
1300					2	3	2	1								

この表はラベル 4 に見られる数字をラベル 2・ラベル 3 の検討の際に行ったように 100 番単位で分類し、その採集年次ごとの点数を一覧にしたものである。一見して理解できるように、番号は採集年代順に付与されているわけではなく、また 1880 年以降の採集の標本にも付与されており、ブラキストンが最初に寄贈した際に付与されていたラベルと考えることはできない。ブラキストン離日後の採集にかかわる 2 点についても検討を加える必要がある。

ラベル 4 に「322」という記載を持つキセキレイ【3137】は 1885 年 7 月 23 日札幌採集である。この標本には先に見たラベル 2・3 は付属しておらず、北大植物園で利用していたラベルのみが付属している。ラベル 4 は他の標本では脚部に結び付けてあるが、この標本には単に足にくぐらせているだけである。ここから、キセキレイ【3137】に付属するラベル 4 は、北大植物園の収蔵庫内で外れてしまったものをブラキストン標本でない標本に誤って付与した可能性が高い。同じくラベル 4 に「87」の記載を持つミヤマカケス【3325】は、「38-9-25、虻田郡産」という和紙に記載されたデータを有する。これもラベル 2・3 は付属しておらず、採集年次からもブラキストン採集とみなすことはできない。この標本のラベル 4 も先に見たキセキレイ【3137】と同様に足にくぐらせているだけのものであり、誤って付与された可能性が高い。この 2 点を除外すれば、このラベルはブラキストンが採集を行った時期の標本にのみ付属していることになる。

傾向として、おおよそ種ごとに連続して番号が付与されている²⁶が、その順番はブラキストン (1882) の分類によるものではない。ブラキストンが分類することなくラベルを付与する必要があったとは考えづらいこと、ラベル番号の分布からみて「1314」以降の数字を持つラベルは最初からなかったものと考えられることから、このラベル 4 はブラキストンの最初の寄贈点数にあわせて作成されたラベルで、1883 年以降に点数確認のために付与されたものと考えられないだろうか。このことについて、検討してみたい²⁷。

可能性の第一として、市立函館図書館所蔵の『Birds of Japan』に付属する、渡辺印のある「明治十七年九月廿日ブラキストン献品鳥類調査」というメモに、献品数が 1314 羽である旨が記載されている。この調査がどのようにして実施されたのかについてはわからないが、函館博物場のスタッフであった渡辺章三によって 1884 (明治 17) 年に「1314」点が確認されたことが知られる。現在もブラキストン標本が収納されている標本棚²⁸の抽斗の内側には、「十七年八月三羽」というメモが貼られており、この献品鳥類調査の際に貼られたものと推測される。

可能性の第二として、同じく函館図書館蔵の「明治二十五年四月素博物場陳列物品商業学校江引継物品及其外物品書類」に明治二十四年調として「ブラキストン献品鳥類 1314 種」という記載があり、1891 (明治 24) 年にも「1314」を確認したことが知られる。既述したように、1879 年段階で 1314 点が寄贈され、1883 年までに相当数の標本が追加・差換えされたと考えられるにもかかわらず、1314 点という寄贈当初の標本数がこの二回の調査で確認されていることから、どちらかの調査において、寄贈記録に残された 1314 点という点数を確認するためにこのラベル 4 を作成し、付与していた可能性は高い²⁹。

このラベルについては数字以外の情報がなく、推測が増えてしまったが、このラベルの付属がブラキストン標本のメルクマールであると断言することは困難である。ただ、このラベルはブラキストン離日後に採集され、混入したと考えられる標本には付属しておらず、より古い状況を示すものであることは間違いない。

2.5 ラベル5

ラベル5(写真7)は和紙を短冊状にしたラベルであり、431点に付属している。しかし、和紙を用いているという理由だけでまとめてあり、その記載内容は多様である。

まず、第一のグループとして、ラベル2及びラベル3に見られた採集地・採集日・計測値などが記載されているものがある。これらの記載方法はラベル2・ラベル3と共通であり、採集段階で付与されたメモと考えてよいと思われる。第二のグループは和名が記されているもので、特徴としてあげられることは、現在のところ見出せない。第三のグループは「五拾号」などといった漢数字で記載されている分類番号である。この数字はブラキストン(1892)の種番号と合致し、ブラキストンが製作にかかわったとされる標本棚の抽斗に貼り付けられているラベルの番号とも合致する。ラベル2よりも後に付与されたことがわかる³⁰ため、開拓使への寄贈に際してブラキストンが整理のために付与したか、受入れた博物館が収蔵のために付与したものと考えられる。

この点については次の標本が明らかとする。ノスリ【4286】に「明治十九年二月、函館、勸業課長崎献」、オオパン【4161】に「十九年八月五日、亀田郡中川村、函館区地蔵町十四番地高島精一献、♀」と記された和紙のラベル(ラベル5に含まれる)が付属している。採集データから、これらの標本がブラキストンの採集によるものではなく、函館仮博物館時代の標本であることは明らかである。しかし、後者には「百五拾壺号」と記されたもう1枚のラベル5が付属している。ここから、漢数字の分類番号の記載されたラベル5は、ブラキストンによって付与されたものではなく、1886(明治19)年以降に函館仮博物館あるいはその後の管理者によって付与されたものであることが理解される。

ラベル5には、ラベル2・3と同様の採集データ、和名、分類番号のほかに、既述したような函館仮博物館時代に採集されたことを示す採集データがある。これらは個別に検討しなければならないが、やや煩雑になるので後述することとしたい。

以上の点から、ラベル2・3形式の採集データのあるものはブラキストン標本として検討する余地はあるが、ラベルの分類が困難であり、扱いには留意しなければならない。

2.6 ラベル6

ラベル6(写真8)は札幌農学校所属博物館の名前が印刷されたラベルである。このラベルには管理番号が書き込まれており、その番号は『採集日記』の類別番号と合致している(下記一覧参照)。標本名及び類別番号の合致から考えて、このラベルが付与されている標本は1900(明治33)年に函館中学校から移管された136点に含まれるものと考えて間違いない。「札中」、「北師」の記載を持つ標本にはこのラベルが付属しておらず、その裏付けとなろう。

(表3) ラベル6記載番号と『採集日記』類別番号³¹

類別番号	『採集日記』 標本名	標本 番号	台帳標本名	備考
1802	アカハラ	3152	アカハラ	
1803	ツグミ	3129	ツグミ	
1804	ツグミ	3120	ツグミ	
1805	ノゴマ	3083	ノゴマ	
1806	カワラヒワ	3078	カワガラス	標本名に問題あり
1807	ノビタキ	3105	ノビタキ	
1808	ノビタキ	3110	ノビタキ	
1809	キビタキ	3310	キビタキ	
1810	サメビタキ	3297	サメビタキ	
1811	ヒヨドリ	3289	ヒヨドリ	
1812	コヨシキリ	3546	コヨシキリ	

類別番号	『採集日記』 標本名	標本 番号	台帳標本名	備考
1813	コヨシキリ	3543	コヨシキリ	
1814	ビンズイ			
1815	タヒバリ	3586	タヒバリ	
1816	タヒバリ	3568	タヒバリ	
1817	タヒバリ	3580	タヒバリ	
1818	タヒバリ	3573	タヒバリ	
1819	ヒガラ	3200	ヒガラ	
1820	コガラ	3241	コガラ	
1821	シジュウカラ	3748	シジュウカラ	
1822	シジュウカラ	3749	シジュウカラ	

類別 番号	『採集日記』 標本名	標本 番号	台帳標本名	備考
1823	ゴジュウカラ	3228	シロハラゴ ジュウカラ	
1824	ゴジュウカラ	3224	シロハラゴ ジュウカラ	
1825	シマエナガ雄			
1826	ホオジロ雌	3498	ホオジロ	
1827	ホオジロ	3489	ホオジロ	
1828	ホオアカ雄	3381	ホオアカ	
1829	ホオアカ雌	3366	ホオアカ	
1830	アオジ雌	3702	アオジ	
1831	アオジ雄	3714	アオジ	
1832	オオジュリン	3497	オオジュリ ン	
1833	シマアオジ雄	3383	シマアオジ	
1834	カシラダカ	3519	カシラダカ	
1835	オオジュリン			
1836	キセキレイ	3141	キセキレイ	
1837	ヤマセミ	3449	カワラヒワ	?
1838	ウソ	3716	ウソ	
1839	ウソ	3724	ウソ	
1840	ベニマシコ	3206	ベニマシコ	
1841	ベニマシコ	3209	ベニマシコ	
1842	ハギマシコ	3438	ハギマシコ	
1843	ハギマシコ	3433	ハギマシコ	
1844	ニュウナイスズ メ	3416	ニュウナイ スズメ	
1845	ニュウナイスズ メ	3410	ニュウナイ スズメ	
1846	アトリ	3470	アトリ	
1847	ムクドリ	3345	ムクドリ	
1848	ムクドリ	3347	ムクドリ	
1849	コムクドリ	3363	コムクドリ	
1850	コムクドリ	3352	コムクドリ	
1851	キレンジャク雄	3255	キレンジャ ク	
1852	キレンジャク	3253	キレンジャ ク	
1853	サンショウクイ	3294	サンショウ クイ	
1854	イワマキツバメ	3067	イワツバメ	ラベル6に「イ ワマキツバメ」 とあり
1855	ショウドウツバ メ	3047	ショウドウ ツバメ	
1856	ヨシゴイ	4258	ヨシゴイ	
1857	オオソリハシシ ギ	3840	オオソリハ シシギ	
1858	オオソリハシシ ギ	3838	オオソリハ シシギ	
1859	コシヤクシギ	3896	コシヤクシ ギ	
1860	ムナグロ	3782	ムナグロ	
1861	ムナグロ	3911	ムナグロ	

類別 番号	『採集日記』 標本名	標本 番号	台帳標本名	備考
1862	オジロシギ	3872	アオアシシ ギ	
1863	イカルチドリ	3769	シロチドリ	?
1864	トウネン	3955	トウネン	
1865	キアシシギ	3917	キアシシギ	
1866	キアシシギ	3915	キアシシギ	
1867	イカルチドリ	3761	イカルチド リ	
1868	イソシギ	3884	イソシギ	
1869	ウズラシギ	3791	ウズラシギ	
1870	ヒバリシギ	3963	ヒバリシギ	
1871	ハマシギ	3810	ハマシギ	
1872	シギsp.	3794	タシギ	ラベル6に分類 番号無し
1873	シギsp.	3799	タシギ	
1874	タシギ	3978	タカブシギ	?
1875	タシギ	3975	タカブシギ	?
1876	オオジシギ	3985	オオジシギ	
1877	オオジシギ	3800	タシギ	旧台帳にジシ ギとあり、改め て同定したもの
1878	カワセミ	3188	カワセミ	
1879	カワセミ	3185	カワセミ	
1880	アカゲラ雄	3652	エゾアカゲ ラ	
1881	アカゲラ雌	3656	エゾアカゲ ラ	
1882	エゾオオアカゲ ラ雄	3638	エゾオオア カゲラ	
1883	エゾオオアカゲ ラ雌	3643	エゾオオア カゲラ	
1884	ヤマゲラ雄	3676	ヤマゲラ	
1885	ヤマゲラ雌	3674	ヤマゲラ	
1886	ヤマセミ雌	3028	ヤマセミ	
1887	アカショウビン 雄	3183	アカショウ ビン	
1888	ヒクイナ	4185	ヒクイナ	
1889	クイナ	4171	クイナ	
1890	クイナ	4172	クイナ	
1891	ヨタカ	3173	ヨタカ	
1892	ハリオアマツバ メ	3166	ハリオアマ ツバメ	
1893	ツツドリ雄	3615	ツツドリ	
1894	ツツドリ雌	3613	ツツドリ	
1895	チゴハヤブサ	4278	チゴハヤブ サ	
1896	ミヤマカケス	3330	ミヤマカケ ス	
1897	クマガラ雌	3036	クマガラ	
1898	ハシブトガラス 雌	3040	ハシブトガ ラス	
1899	ハシボソガラス 雄	3759	ハシボソガ ラス	

類別 番号	『採集日記』 標本名	標本 番号	台帳標本名	備考
1900	ハシボソガラス 雌	3753	ハシボソガ ラス	
1901	ヤマセミ雄	3029	ヤマセミ	
1902	オオタカ雌	4273	オオタカ	
1903	アカエリヒレア シシギ	3936	アカエリヒ レアシシギ	
1904	ホウロクシギ	3887	ホウロクシ ギ	
1905	シラヒゲウミス ズメ	4198	シラヒゲウ ミスズメ	
1906	トキ	4240	トキ	
1907	ハヤブサ	4271	ハヤブサ	
1908	ミヤマカケス	3334	ミヤマカケ ス	
1909	アオバト	34403	アオバト	
1910	ウトウ	4232	ウトウ	
1911	ケイマフリ雄			
1912	ヒシクイ雌	4140	ヒシクイ	
1913	オオハム雌	4144	シロエリオ オハム	
1914	アビ?雌	4123	アビ	
1915	ヒメウ	4105	ヒメウ	
1916	ヒドリガモ雄	4318	ヒドリガモ	
1917	ヒドリガモ雌	4324	ヒドリガモ	
1918	ハシビロガモ雄	4064	ハシビロガ モ	
1919	オナガガモ	4334	オナガガモ	

類別 番号	『採集日記』 標本名	標本 番号	台帳標本名	備考
1920	ホシハジロ雄	4090	キンクロハ ジロ	旧台帳にホシ ハジロとあり、 改めて同定し たもの
1921	ビロードキンク ロ雄	46166	ビロードキ ンクロ脚部	
1922	ビロードキンク ロ雌	4091	ビロードキ ンクロ	
1923	クロガモ?雌	4114	コクガン	?
1924	カルガモ雄	4036	カルガモ	
1925	オンドリ雄	4327	オンドリ	
1926	オンドリ雌	4329	オンドリ	
1927	カワアイサ	4100	ウミアイサ	?
1928	ミコアイサ	4087	ミコアイサ	
1929	コガモ	4342	コガモ	
1930	トモエガモ雄	4034	トモエガモ	
1931	シジュウカラガ ン	4118	シジュウカ ラガン	
1932	ウミネコ	4000	ウミネコ	
1933	ユリカモメ雌	3987	ユリカモメ	
1934	ウミガラス	4214	ウミガラス	
1935	ダイサギ	4247	ダイサギ	
1936	ウミスズメ雄	4212	ウミスズメ	
1937	スズメ	3396	スズメ	

現存する標本のうち、このラベル 6 を有し、かつ『採集日記』の類別番号と合致する番号を持つものは一覧に見る 132 点（ラベルに番号記載のないタシギ【3794】を含む）である。ラベル 6 が外れた状態で標本群に含まれている可能性もあるが、現在台帳登録されている標本の中に可能性のあるものはなく、移管された時点から 4 点減少していることになる³²。

このラベル 6 は札幌農学校所属博物館時代のラベルであり、ブラキストン標本のみに付与されているわけではない。従来ブラキストン標本とみなされてきた標本のうち、この 132 点以外に、ラベル 6 が付属している 10 点について検討し、ブラキストン標本であるかどうかを確認しなければならない。

・ショウドウツバメ【3051】

この標本のラベル 6 には「スナムグリ」と記載されており、裏面に「1812」という番号が記されている。この番号は裏面に記されていることから、『採集日記』の類別番号と考えることはできない。また、「スナムグリ」はカワセミの異名であることから、何らかの理由で他の標本のラベルが誤って付与されたものと考えられる。この標本にはラベル 2 が付属していることから、この標本そのものがブラキストン標本の 1 点であることは間違いなからうが、『採集日記』に記載される 1900 年移管の標本に含まれるものではない。

・ヨタカ【3178】

この標本のラベル 6 には「1733、ヨタカ、石狩札幌、講、33 年 9 月 23 日」と記されており、ブラキストン標本を記載日に購入した可能性もないわけではない。しかし、『採集日記』の 1733 番ヨタカの記載を見ると、「33 年 12 月 15 日受入」とあり、その前後に記載されている標本とともに受入れられたことが理解されることから、ラベル記載の日時は採集日と見るべきであろう。ラベル 2 あるいはラベル 3 は付属しておらず、ブラキストン標本と考えることはできない。

・キレンジャク【3251】

この標本のラベル 6 には「1708、キレンジャク、早、後志ヲタルナイ、村田、33 年 4 月 26 日」と記されており、札

幌農学校時代の博物館スタッフであり、かつ『採集日記』の記者と考えられる村田庄次郎³³の採集によるものと考えられる。『採集日記』の当該番号は採集地「後志国小樽内川村」とあるのみで、標本名などの記載はない。これにもラベル 2・3 は付属しておらず、ブラキストン標本と考えることはできない。

・メボソムシクイ【3550】

この標本のラベル 6 には「1583、メボソ、み、札幌、村田、31 年 9 月 29 日」と記載がある。『採集日記』の当該番号では「30 年 9 月 29 日」とあり混乱が見られるが、『採集日記』のこの前頁は 31 年の記載が主なものであり、次の頁は 30 年から 32 年へと年次が急に変わっている。『採集日記』にはこの他にも年次に不審な点が数多くあり、年次についてはラベル 6 の記載を信用すべきと考えるが、採集者は村田であり、ブラキストン標本と考えることはできない。これもラベル 2・3 は付属していない。

・ヒバリ【3630】

この標本のラベル 6 には「1706、ヒバリ、み、後志ヲタルナイ、村田、33 年 4 月 26 日」と記載がある。先に見たキレンジャクと同様『採集日記』は空欄となっているが、採集地は合致する。村田採集であると同時にラベル 2・3 は付属しておらず、ブラキストン標本と考えることはできない。

・エゾアカゲラ【3649】

この標本のラベル 6 には「1711、アカゲラ、み、石狩厚別、村田、33 年 4 月 27 日」と記載がある。『採集日記』の標本名欄は空欄となっているが、採集地は「石狩国厚別村」とあり、データは合致する。村田採集であり、ラベル 2・3 も付属せずブラキストン標本とは考えられない。

・アリスイ【3661】

この標本のラベル 6 には「1567、アリスイ、み、札幌、村田、31 年 5 月 4 日（26 日を修正してある）」と記載がある。『採集日記』の当該番号の記載と合致し、村田採集であることは間違いない。これにもラベル 2・3 は付属していない。

・ウミネコ【3996】

この標本のラベル 6 には「1660、ウミネコ、銭函村、32 年 9 月 15 日」とあり『採集日記』では「購入資料」となっている。ラベル 2・3 も付属しておらず、ブラキストン標本とみなすことはできない。

・ホオジロガモ【4078】

この標本にはラベル 6 は付属しているが、記載はまったくない。ラベル 2 は付属しておりブラキストン標本と考えられるが、『採集日記』に記載された標本群とは別のルートを経由したものと思われる。

・カイツブリ【4127】

この標本のラベル 6 には「1797、カイツブリ、小樽内川、33 年 9 月」とあり、『採集日記』の当該番号を見ると、採集年次は記載されていないが、「34 年 10 月」に受入れられたことがわかり、ラベル 6 の記載年次は採集日であると考えられる。この標本にはラベル 2・3 は付属しておらず、ブラキストン標本と考えることはできない。

以上、ラベル 6 付属の標本のうち、『採集日記』記載のブラキストン採集標本に含まれないものを検討してきたが、シヨウドウツバメ【3051】、ホオジロガモ【4078】の 2 点を除く 8 点はブラキストン標本ではないことがわかった。それでは、なぜこの 8 点がブラキストン標本に含まれているのだろうか。その理由は多くのブラキストン標本に付属するラベル 7 がこれらの標本に付属していること、それに押されている「ブラキストン標本」の印によるものと考えられる。この特徴は本章 5 節でブラキストン標本から除外されるとみなしたノスリ【4286】、オオバン【4186】にもいえることである。次節でそのラベル 7 について検討する。

2.7 ラベル 7

ラベル 7（写真 9）はブラキストン標本として管理されてきた 1343 点中 1024 点に付属している。記載事項は学名、和名、採集日、採集地、「BINa」という種ごとの分類番号である³⁴。このラベルは数多くの標本に付与されており、既述したようにブラキストン標本のメルクマールとしてみなされてきたようである。しかし、前節で見たように、ブラキストン採集でないことが明らかな標本にも付属しており、その扱いには検討を要する。以下、このラベルの有する特徴を検討し、付与した人物、付与された時期を明らかにしたい。

ラベルの付属状況について検討してみると、このラベル 7 の付属状況はある特徴を有している。第一に、先に見たラ

ベル6の付属する標本のうち、『採集日記』に合致する132点にはラベル7は付属していない。第二に、「札中」及び「北師」というデータは、ラベル2・3・4か、分類できないラベルに記載されているが、記載のある標本にはラベル7は付属していない。ここから、ラベル7の付属している標本は、函館中学校に保管されていた標本のうち、1900年に北大植物園（札幌農学校所属博物館）に移管された136点を除く標本群に付与されていると判断してよからう。しかし、函館中学校から1908年に移管された標本数は谷津の記載から989点であると考えられるのに対し、現状では1024点に付属しており、35点増加している。これまでの検討からもわかるように、北大植物園のスタッフによって採集された標本にもラベル7は付与されており、北大植物園に移管されてから誤って付与されたことが予想される。

次に、ラベルに記載されている内容から検討してみたい。「BINo.」として記載されている分類番号を例示すると、エゾライチョウ【4153】には「BINo.155.380」とある。ガンカモ類を中心として後半の分類番号が記載されていないものも存在するが、大部分は上記のようなものである。この意味するところは、「B1」は当然のことながら、ブラキストンを示すものであり、次の数字はブラキストン（1882）に見る分類番号である。ピリオド以降の数字は、シーボーム（Seeböhm）（1890）の分類番号であることがわかった。この分類番号からは次のように判断されよう。「B1」と記載する以上、このラベルの作成者はブラキストン以外で、ブラキストンの分類について知識を有している存在であり、かつシーボームの分類にも通じている存在である。八田三郎・村田庄次郎の編纂した「北海道産鳥類目録」（八田・村田,1906）が、シーボーム（1890）および飯嶋魁『日本の鳥目録』の配列に従って記載されていることから、このラベルは八田・村田の分類基準にのっとって作成されたものと考えてよからう。

さて、このラベルが八田・村田によって作成されたものであれば、他の記載内容についても彼らの基準にのっとっているものと推測される。記載されている学名は、山階他（1932）の目録において「Specific Names Adopted by Blakiston」として掲載されているものに合致し、山階・犬飼らはこのラベル7をブラキストンによって付与されたものと考えたようである。ラベル7とブラキストンの目録、シーボームの目録を比較してみよう。アカハラで見ると、ラベル7では「*Merula chrysolaus*」、ブラキストンでは「*Turdus chrysolaus*」、シーボームでは「*Merula chrysolaus*」であり、イソシギで見るとラベル7では「*Totanus hypoleucus*」、ブラキストンでは「*Tringoides hypoleucus*」、シーボームでは「*Totanus hypoleucus*」であるように、一貫してシーボームの学名にしたがっていることがわかる。ここからも、このラベル7はブラキストンによって付与されたものではなく、八田・村田らによって付与されたものであるとみなしうる。

ラベルが付与された時期としては函館中学校から北大植物園（東北帝国大学農科大学）に最終的に移管されたのは1908年10月であり、北大植物園所蔵標本が混入していることから考えればこれ以降の付与になるとみなしてよい。「札中」、「北師」及び1900年の函館中学校からの移管標本に付属していないことから、それらと統合されて保管される前に付与されたものであり、1908年に標本棚ごと移管された後、他のグループと統合される前に幾ばくかの植物園標本が標本棚の中に混入し、それらにもあわせてラベル7が付与されたのだろう。

以上の検討から、山階・犬飼らは、八田・村田らによって付与されたラベル7をブラキストンの付与したラベルであると認識し、そのラベルの付属によってブラキストン標本の選別を実施したことはまず間違いない。しかし、このラベルは明らかにブラキストンによって付与されたものではなく、このラベルをもってブラキストン標本であると判断してはならない。また、このラベルに記載されている採集日及び採集地データは、ブラキストンを中心とした採集者グループによって付与されたと考えられるラベル2・3と齟齬している事例が看過できないほど多く見られる³⁵。採集者・標本製作者によって付与されたラベルのデータと比較して、その情報の精度については疑問視せざるを得ず、このラベルを基にして検討することには注意しなければならない。

2.8 ラベル8

ラベル8（写真10）は235点の標本に付属しており、記載事項は学名と和名である。傾向としては、標本群に満遍なく付与されているわけではなく、特定の種について分類するために付与したものようである。このラベルは他の植物園収蔵標本には見られず、作成者についても不明であるが、付与された時期を示す記載がある。ワシカモメ【4006】には「*Larus glaucescens* Naumann、ワシカモメ」とあり、裏面に「*Larus avegae* に非ずや（Y. Y）」とある。この裏面の記載は山階芳麿のものであり、山階が北大植物園内の博物館標本を調査した1930年代に記載されたものであろう。この点からすれば、このラベル8はそれ以前に付与されたものとなる。

2.9 その他のラベル

以上、ブラキストン標本群に付属するラベルのうち、相当数が付属しており分類可能なものについて考察を進めてきたが、その他にも多様なラベルが付属している。

ラベルの様式はラベル 2・3 とまったく異なるものの、採集記録の記載内容は同様のものであるものやプライヤーから送られてきた資料であることを示すラベルがあり、これらについてはブラキストン標本のメルクマールとみなしうる。

次に、名取武光がスタッフに加わった昭和初期頃に利用されていたと考えられるラベル（写真 11）の付属する標本のうち、ウミガラス【4226】の当該ラベルには「1911」という数字が記載されている。この番号は、ラベル 6 の検討の際に見た、『採集日記』の類別番号と同じものと考えられ³⁶、ラベル 6 が破損した、あるいは種同定を改めて実施し、ケイマフリからウミガラスへと修正した上でラベルを付け替えたものではないだろうか。この標本にはラベル 2、ラベル 4、「Shimsir, aug, ♂」と記載された分類できないラベル³⁷がついており、ラベル 6 が変更されていること以外には『採集日記』に記載されている 131 点と異ならない。

このラベルは他に 12 点の標本に付属している。他のラベルの付属状況から分類すると、(i) ラベル 2 が付属しているものが 6 点³⁸、(ii) 分類できないラベルでラベル 2 様式を持つものが 1 点³⁹、(iii) 分類できないラベルに「北師」の記載のあるものが 1 点、(iv) ラベル 4 は付属しているものの、ラベル 2・3 及びそれに類するものを持たないものが 1 点、(v) ラベル 7 のみ付属しているものが 1 点、(vi) 他のラベルが付属せず、「例外番号 1、ブラキストン標本」という記載があるものが 1 点と、(vii) 他のラベルが付属せず、かつ記載のないものが 1 点になる。

(i)、(ii) に含まれる 7 点はこれまでの検討からブラキストン標本とみなしてよいだろう。(i) のうち、コシジロウミツバメ【3633】付属のこのラベルには「目録番号 178、名取」と記載されており、山階らによる目録の番号が付与されていることから、1932 年の目録発行以後に補助的につけられたものと考えられる。

(iii) に含まれるウミスズメ【4227】に付属するラベルは、ノート片に「9.29 うみすずめ」と記載がされているのみで、ブラキストン由来のラベルやデータはまったく残されていない。北海道師範学校に保管される以前、あるいは保管中に混入した可能性もあり、他の「北師」の記載のある標本群に比べればその裏付けは乏しい。

(iv) に分類されるものは、センダイムシクイ【3549】である。ラベル 4 に「233」という記載があり、ラベル 7 が付属しており、他のラベルは付属していない。ラベル 4 のみでは判断材料に乏しいが、函館から分散される前に確認されたもので、ブラキストン寄贈によるものである可能性は高い。

(v) に分類されるウトウ【4229】にはブラキストン由来と考えられるようなラベルはまったく付属しておらず、また、本剥製でもある。ブラキストンの寄贈した標本は仮剥製といわれており⁴⁰、ブラキストン採集と考えることは難しい。

(vi) はエゾフクロウ【3010】である。ラベル 1 とこのラベル以外にラベルは付属しておらず、判断材料がない。従来ブラキストンの作製した剥製は腹部を縫合していないといわれている⁴¹が、この標本は腹部を縫合してある。しかしながら、この条件は必ずしもすべての標本にいえることではない。ラベルに明確にブラキストン標本と記載してはあがある、留保せざるを得ない。

(vii) に分類されるものはオオセグロカモメ【4019】である。これも腹部を縫合してあり、他に判断材料もない。(vi) に見られたような「ブラキストン標本」としての記載もなく、ブラキストン採集と考えることは難しい。

このラベルは 1930 年代（犬飼・名取の時代）に利用されたものであり、この時代にはすでに相当数の標本の混入が見られる。そうである以上このラベルの付属のみをもってブラキストン標本とみなすことはできない。

この他に、ラベル 6 とほぼ同様の形態で、枠線のないラベル（写真 12）がある。このラベルは 22 点に付属している⁴²。このラベルは北大植物園所蔵の民族資料などにも付属しており、記載の番号が重複していないことから、何らかの台帳に登録するために付与されたラベルと推測される。この 22 点中ブラキストン標本であることを示すラベル 2・3 あるいはそれに類するものは付属しておらず、ラベル 7 もしくはラベル 8 が付属しているのみである。採集年代は 1880 年から 1897 年の間でほとんどがブラキストンの採集にかかわる年代のものではなく、混入されたものと推測される。22 点中、ブラキストン標本として検討する余地のありそうなものを提示すると、ヤマセミ【3031】にはラベル 7 とラベル 4 に似たラベルが付属しており、そのラベルには「830」と印字されて、裏面には「ブ氏」と記載がある。ラベル 4 には「830」という数字がすでに利用されており⁴³、またラベル 4 の記載は印字されたものではないことから、このラベルをラベル 4 とみなすことはできない。採集日も 1890 年であり、ブラキストン採集と考えることはできない。キセキレイ【3137】はラベル 4 の検討の際に提示した資料で、ラベル 4 が誤って付与されたものと考えられる。これも 1885 年採集であり、ブ

ラキストン採集と考えることはできない。

2.10 共通の記載

本節ではラベルの様式に関係なく、記載されている事項について簡単に触れておく。

既述したように「札中」、「北師」という記載はラベル2・3及び分類できないラベルにあり、記載方法から見て同時に実施されたものと推測される。

八田三郎が作製したという「ブラキストン標本」印はラベル2・3・4・6・7及び分類できないラベルに押されている。ラベル7に押されていることから、1908年以降に押されたものと考えられるが、ブラキストン標本と考えることができないものにも押されており、その扱いには注意する必要がある。

この他に、「No.5.1」というような鉛筆書きの記載がある。ラベル7の付属しているものにはそこに記入されているが、付属していない場合はラベル2・3やラベル4・6に記入されており、ラベル7が付与され、他の受入資料群と統一されてから書き込まれたものである。現時点ではこの番号の意味するところは不明である。

以上、ブラキストン標本とされる標本群に付属するラベルについて検討を重ねてきた。次章でこれらの検討の結果明らかとなった受入過程について、まとめてみたい。

3. ラベルの付属状況から見た移管及び整理の過程

ブラキストンによって採集された鳥類標本が北大植物園に受入れられるまでの過程を、ラベルの付属状況からまとめる。と次のようになる。

I ブラキストン・福土成豊らによる採集及び標本作製（～1883）

鳥類採集と同時に、採集情報を記載したラベル2・3・和紙のラベル（ラベル5の採集情報付属のもの）、分類できないラベルで採集情報を記入したものなどを付与した。また、プライヤー、スノーらからの寄贈標本にも分類困難なラベルが付与されていたものと思われるが、現時点では明確に分類することはできない。ブラキストンは標本を管理する際に、ラベル2・3に管理番号を付与した。

II ブラキストンから開拓使函館仮博物場への寄贈、函館仮博物場及び函館商業学校における標本管理（1879～1895）

函館仮博物場及びその後身である函館商業学校の商品陳列場は、ブラキストンから寄贈を受け、管理を実施した。後に最初の寄贈点数1314点を確認するためにラベル4を作成、付与したものと考えられる。また、ブラキストンと協力して作製した標本整理棚に分類して保管するために、1886（明治19）年以降にブラキストン編纂の目録に従ってラベル5（漢数字で分類番号が記載されているもの）を付与した。この時点でブラキストン寄贈以外の標本に対してもラベル5を付与しており、混入が始まったものと思われる。

III 函館商業学校の廃止にともなう標本の分散（1895）

函館商業学校が廃止され、函館中学校1125（989+136）点超、北海道師範学校89点超、札幌中学校75点超と分散される。各保管場所で整理された形跡はなく、ラベルが付与された形跡もない。

IV 函館中学校から札幌農学校への一部移管（1900）

1900年12月に136点が函館中学校から北大植物園（札幌農学校所属博物館）に移管される。これらの標本は『札幌農学校所属博物館採集日記』に記載され、ラベル6が付与された。

V 北海道師範学校及び札幌中学校からの移管（八田着任～1908の間）

八田三郎によって、北海道師範学校（89点）及び札幌中学校（75点）から北大植物園（札幌博物館）に移管される。「札中」、「北師」の記載から、ほぼ同時期に移管、整理されたものと考えられる。明確な移管時期は不明だが、谷津の報告と函館中学校からの移管の間にはほとんど時間的差がなく、函館中学校からの移管がブラキストン標本統合の最終的な行為と考えられることから、両校からの移管はそれ以前のことと考えてよい。後に実施される函館中学校からの移管標本の整理とは性格を異にしており、時期的には多少離れるものと推測される。

これらの標本の整理に際しては特別にラベルを付与してはいないが、「札中」、「北師」と記入し、受入れ元の情報を付与したと考えられる。

VI 函館中学校からの移管（1908）

1908年10月10日に函館中学校から北大植物園（札幌博物館）に989点が移管された。この移管の際に標本棚も移されたものと考えられる。移管後、八田三郎、村田庄次郎によって分類・整理され、ラベル7が付与されたが、1900年の函館中学校からの移管標本、札幌中学校、北海道師範学校からの移管標本には付与していない。移管された989点中には函館の博物館で収集された標本も含まれており、また移管後に相当数の植物園所蔵標本が混入し、それらにもラベル7が誤って付与された。

VII 八田三郎による標本管理（1908～在任中）

ラベル7の付与の後、その他の移管標本と統合し、「ブラキストン標本」の印が押された。選別の基準は定かではないが、ラベル7の付与の際に混入した標本にも押されている。

VIII 山階芳麿・犬飼哲夫らによる目録作成及び調査（1932）

ラベル7がブラキストンによって付与されたものという前提で、山階・犬飼らによって標本群が整理され、目録が作成された。この整理に基づき、1331点という標本数が公にされたが、この中には多数の混入が見られる。

IX 北大植物園による標本管理（1932～）

山階・犬飼らの整理に基づき、ブラキストン標本としての位置付けを与えられた標本群を管理し、1960年代以降にラベル1を用いて現行の標本台帳の作成、標本管理を実施した。標本点数は所在不明を含めて1345点となっており、さらに混入が進んだものとみられる。

以上がラベルの付属状況から見た、北大植物園所蔵ブラキストン標本の受入れ及び整理の過程である。この考察結果を妥当なものとするならば、犬飼の述べる1881年に札幌の博物館に移管された標本には、ラベル2か、ラベル5及び分類できないラベルのうち、採集データが記載されているものが付属し、ラベル4やラベル5の漢数字による分類のあるもの、ラベル6やラベル7は付属していないはずである。そこで、ラベル2が付属し、かつラベル4などが付属していないものを検索すると、ニューナイスズメ【3404】が検出される。これは「札中」の記載を持ち、1881年に受入れられたものではない。またそれ以外で上記条件に適合するものもすべて「札中」、「北師」の記載があり、同様に1881年に受入れられたものではない。

上記検討から、ラベルの付属状況からという限定はつくものの、犬飼のいうところの1881年の北大植物園（札幌博物館）への移管はなかったものと考えられる。また、東京での博覧会出品とそれにとまなう補充という事柄は完全に否定することはできないが、それを裏付けるような出品の記録、標本の存在も見出すことはできず、ブラキストン標本の移管過程に関する犬飼の報告については、扱いに留意する必要がある。

4. ブラキストン標本の現状

4.1 ブラキストン標本とは

最後に、北大植物園に所蔵されるブラキストン標本の現状をこれまでの検討を基に整理し、今後の利用の一助としたい。

ここで、「ブラキストン標本」を定義づけておかねばならないであろう。ここまでは、ブラキストンから開拓使に寄贈された標本群についても、また分散してまとめられた標本群についてもブラキストン標本として表記してきた。しかし、検討の結果、明らかにブラキストンが収集して開拓使に寄贈したとは考えられないものがこれまでブラキストン標本としてみなされてきたことが理解される。今後、ブラキストン標本を歴史的資料として利用する場合には、ここで「ブラキストン標本」とは何をさすのか、を明確にしておかねばならない。「ブラキストン標本」とはブラキストンが収集・採集し、開拓使の函館仮博物館に寄贈した標本群であって、それ以外の何ものでもなく、保管や移管の過程で混入したものは「ブラキストン標本」としてみなされるべきものではない。そこで、次のように定義づけたい。

- ・ブラキストン標本：ブラキストンが収集し、管理した標本のうち、開拓使函館仮博物館に寄贈した標本
- ・標本群A：ブラキストンが寄贈したものであると思われるが、確たる裏付けとなる証拠がない標本
- ・標本群B：ブラキストンが寄贈したのではないと考えられるが、否定する根拠に乏しい標本もしくは、ブラキストンが寄贈したものである可能性は残すものの、ラベルの付属状況からはそれを裏付けるものがない標本
- ・標本群C：明らかにブラキストンが寄贈したのではない標本

以下、この定義に従って分類してゆく。なお、混乱を避けるため、現在の北大植物園所蔵標本群は所蔵標本と表記する。

1900年に移管された標本136点に1908年までに八田三郎によって集められた1152点を加えて合計1288点程が北大

植物園にあるべき標本と考えられるが、この中には函館で保管されている間に混入したと考えられる標本も含まれており、実際のブラキストン標本の点数はこれよりも少なくなる。この後、多少の追加があったにせよ大幅な増加はなかったものと思われる。これに対して、現在の所蔵標本は、疑問符付、所在不明も含めて 1345 点あり、57 点以上の増加が見られることになる。『採集日記』に登録された標本 136 点のうち、少なくとも 3 点（類別番号 1814 ビンズイ、1825 シマエナガ雄、1835 オオジュリン）の存在が確認できない。また、札幌中学校・北海道師範学校から移管された資料群も、谷津の記載からそれぞれ 5 点ずつ減少しており、混入した標本は 70 点以上にのぼると予想される。

所蔵標本 1345 点のうち、ウソ【3721】、ウミスズメ【4228】が所在不明となっており、この 2 点を除いた 1343 点について、ラベルの付属状況に基づいて確認してゆこう。

まず 1343 点中、ラベル 2 あるいはラベル 3 が付属している 1172 点はブラキストン標本と判断して間違いはない。残りの 171 点中、これまでに確認してきたものは次のものである（標本番号のみ記載）。

- 2 章 4 節 標本群 C 2 点 (3137、3325)
- 2 章 5 節 標本群 C 2 点 (4286、4161)
- 2 章 6 節 標本群 C 8 点 (3178、3251、3550、3630、3649、3661、3996、4127)
- 2 章 9 節 ブラキストン標本 1 点 (3651)
- 標本群 A 1 点 (3549)
- 標本群 B 2 点 (3010、4227)
- 標本群 C 23 点⁴⁴ (3031、3041、3055、3076、3114、3118、3146、3195、3264、3288、3314、3473、3575、3621、3682、3795、4019、4057、4154、4169、4229、4259、8182)

ブラキストン標本 1 点、標本群 A1 点、標本群 B2 点、標本群 C35 点になる。残り 132 点について煩雑になるが、検討してゆこう。

4.2 『採集日記』記載に含まれるもの

132 点中、ラベル 6 を有しているものは 6 点ある（ヒヨドリ【3289】、ホオジロ【3498】、タヒバリ【3573】、エゾオオアカゲラ【3638】、ヒメウ【4105】、トキ【4240】）。このうち、ホオジロ【3498】には「Hakodadi Japan、October、♀」、エゾオオアカゲラ【3638】には「Hakodadi Japan、October、♂、Young」の記載のある分類できないラベルが付属している。これらはラベル 2・3 の記載様式と共通のものであり、この 2 点についてはブラキストン標本とみなしてよい。タヒバリ【3573】はラベルの付属状況からはブラキストン標本としての位置付けを与えることはできないが、腹部が縫合されておらず、ブラキストン標本の特徴を有している。この点からすれば、後述するヒヨドリ【3289】よりもブラキストン標本である可能性は高いものの、本稿ではラベルの付属状況、記載事項を基準にして検討しており、その上では標本群 B に含まざるを得ない。

トキ【4240】にはラベル 5 が付属しており、分類番号「百二拾五号」が記載されている。先に見たようにこのラベルは函館仮博物館の採集によるものにも付与されており、ブラキストン標本としての位置付けを与えることはできない。剥製製作方法にも他の標本と比較して疑問点があり⁴⁵、函館仮博物館から函館中学校を経て、1900 年に北大植物園に受入れられたことは確認できるが、それ以上の評価は困難である。標本群 B に含む。残りの 2 点（ヒヨドリ【3289】、ヒメウ【4105】）については「ブラキストンが寄贈した」という確証はなく、またブラキストン標本としてみないうだけの標本の特徴もない。1900 年に函館中学校から移管された標本という位置付け以上にはできないため、標本群 B に含む。

4.3 「札中」、「北師」の記載のあるもの

126 点中、「札中」、「北師」の記載があるものは、「札中」5 点、「北師」5 点である。「札中」の記載を持つもの（ヒヨドリ【3286】、ウソ【3725】、アオシギ【3846】、イソシギ【3883】、ヒドリガモ【4320】）はすべてラベル 4 が付属しており、古い時代に標本群に含まれていたことは確認されるが、裏付けとなるものは他になく、標本群 A に含むべきものである。

「北師」の記載を持つもの（コサメビタキ【3300】、キビタキ【3304】、ミヤマカケス【3333】、ハマシギ【3830】、クイナ【4187】）のうち、ミヤマカケス【3333】及びクイナ【4187】以外の 3 点は「札中」の標本群と同様にラベル 4 が付属しており、かつ裏付けに乏しいので標本群 A に含まれる。ミヤマカケス【3333】はノート片を利用したラベルに「ミ

ヤマカケス 9、北師」とあり、これは2章9節で見たウミスズメ【4227】と同じラベルである。ラベル4も付属せず、ブラキストン標本や標本群Aに見られるような共通点も見出せないの、標本群Bに含むべきものである。クイナ【4187】も同様にノート片に「12、30、北師」とあるのみで、ラベル4は付属していない。同様に標本群Bに含むべきものである。

4.4 ラベル5または分類できないラベルにブラキストン標本に見られる記載を持つもの

残る116点中、ラベル5にブラキストン標本群と共通の記載が見られるものは、ウグイス【3556】である。これには「Between Tomakomai×Yubuts, 18/5/82 ♀」とあり、記載方法も「Between～」というデータは他には見られないものの共通であり、筆跡もよく似ている。これにはラベル4とラベル8が付属している。ブラキストン標本に含めてよいと考える。

次に分類できないラベルに採集データが見られるものは、14点存在する。

- ・クマゲラ【3033】には「Hakodadi Japan, October, ♂」とある。これにはラベル4、ラベル7が付属している。
- ・ミヤマカケス【3326】には「Hakodadi Japan, October ♀ Young」とある。これにもラベル4、ラベル7が付属している。
- ・ホシガラス【3339】には「Hakodadi Japan, Nov. ♀」とあり、ラベル4、ラベル7、ラベル8が付属している。
- ・ホオアカ【3376】には「Hakodadi Japan August ♂」とあり、ラベル4、ラベル7が付属している。
- ・ホオジロ【3483】には「Hakodadi Japan, July ♂」とあり、ラベル4、ラベル5（和名）、ラベル7が付属している。
- ・オオジュリン【3501】には「Hakodadi Japan, August ♂ Young」とあり、ラベル4、ラベル7が付属している。
- ・ビンズイ【3606】には「Pryer, 27/3/77」とあり、他のラベルは付属していないが、ブラキストンがプライヤーから入手したものと考えてよい。
- ・ヒバリ【3627】には「Hakodadi Japan, October ♂」とあり、ラベル4、ラベル5（和名が記されているもの）、ラベル7、ラベル8が付属している。
- ・ヤマゲラ【3678】には「Hakodadi, Japan, October, ♀」とあり、ラベル4、ラベル7が付属している。
- ・コチドリ【3764】には「Hakodadi Japan, August, ♂」とあり、ラベル4、ラベル7が付属している。
- ・エゾライチョウ【4153】には「Hakodadi Japan, Sep, ♂, Young」とあり、ラベル4、ラベル5（分類番号）、ラベル7が付属している。
- ・ハイタカ【4265】には「Hakodadi Japan, October ♂ (?)」とあり、ラベル4、ラベル5（分類番号）、ラベル7が付属している。

以上の12点については、ラベル2・ラベル3の記載と同一の記載であることから、ブラキストン標本とみなしてよい。

マナヅル【4023】には「Yedo, 10/11.74, ♂」とある。このラベルは荷札ほどの大きさがあり、ブラキストンが利用していたラベルとは考えられないが、「Yedo」の記載はプライヤーから入手したものに共通に見られるものである⁴⁶。しかし、プライヤーの収集標本に付属するラベルがないため、ブラキストン標本としての確たる証拠に欠け、標本群Aに含む。ノゴマ【3084】は「Hakodate, 11th Oct 1890, (裏) Shaku0.555×Shaku0.66」とあり、採集年次や「Hakodate」という記載からも標本群Cに含むべきものである。

4.5 分類できないラベルを持つもの（ラベル2・3様式でないもの）

先に見た分類できないラベルは、ラベル2・3の採集データ様式を持つものであった。次に、それ以外のデータを持つものについてみてゆこう。101点中分類できないラベルを有するものは10点である。

- ・イワツバメ【3068】のラベル7には「3.July 1858, Hakodate」とある。ブラキストンが来日したのは1861年であり、データが誤っていることは明らかである。分類できないラベルには「Hakodadi」と記載されており、異筆で「H.cashmereusis (Qumld), 4, Pryer, ZOOL Soc. 13 July 1858」とある。これまで採集年次とされてきたものは、プライヤーによる発表年次と考えるべきものであろう。このラベルは分類できないラベルとしているが、形式上はラベル2と同じもので、紐を通す場所が異なっているだけであり、ブラキストン標本と考えてよい。他にラベル4も付属している。
- ・ウグイス【3558】には「Japanese name (裏) Uguisu ♂」(他にラベル4・5・7・8付属)とある。この「Japanese

name」という記載を持つラベルは、他に16点存在している。これらにはすべてラベル2が付属しており、採集データは「Tokio (Ota)」というものである。この「Japanese name」のラベルを持つものは、ブラキストンの(1882)の冒頭に記された協力者「Ota」の採集によるもので、ラベル2が欠失したものと考えてよかろう。これはブラキストン標本とみなしてよい。

・クマタカ【4296】には「十二月二日、長三十二四 羽十九〇六」とあり、ラベル4・5(分類番号)・7が付属している。「三十二四」という計測値の表記方法は、ラベル2の裏面に見られるもので、ラベル2に準ずるものとして扱ってもよいが、ラベル2裏面の記載がいつ行われたのか不明であるため、標本群Aとして扱う。

・ハクセキレイ【3145】の分類できないラベルには「Kuril Islands, Motacilla■■■■」という記載がある。採集協力者の一人であるスノーの採集した標本には「Kuriles」と複数形で採集地が記載されており、スノーが付与したラベルとは考えづらいが、ラベル4が付属しており、標本群Aに含んでよいものとする。

・コクマルガラス【3045】の分類できないラベルには「亀田郡亀田村、コクマルガラス、明治十一年六月九日」とある。このような記載はブラキストン標本には見られないものである。他にラベル7、ラベル5(分類番号)が付属している。標本群Bに含まむべきものであろう。

・ニュウナイスズメ【3402】には「ヤマスズメ ♀、函館、廿四年十一月十日 渡辺」(他にラベル7付属)、ウズラ【4191】には「亀田郡亀田村、渡辺■■三、ウズラ」(他にラベル5・7・8付属)とある。前者は採集日から見ても明らかにブラキストン採集とは考えられず、後者も「渡辺」という記載から除外すべきものである。この「渡辺」は先にラベル4の検討で見た「渡辺章三」と考えられる。

・コシジロウミツバメ【3634】には「118、コシジロウミツバメ、♂」という厚紙で作られたラベルが付属している。このラベルは他の標本にはまったく見られない。他にラベル7が付属しており、そこには「June Skoton」という採集データが付属しているので、ラベル2などが付属していた可能性もあるが、現時点では標本群Bとして扱う。

・ウズラ【4188】には「5239、ウズラ」という記載があるが、他にラベルは付属していない。本剥製でもあり、標本群Cに含むべきものである。

・ハイタカ【4262】には「ハイタカ、札幌、十四年九月」とあり、ラベル5(和名が記載してあるもの)、ラベル7が付属している。本剥製であり、標本群Cに含むべきものであろう。

4.6 ラベル5の記載

残り91点中、ラベル5を有する資料は16点である。このうち、ブラキストンの分類に従った漢数字の番号を持つものは11点、一部が残るのみで記載がわからないものが1点(タヒバリ【3592】)になる。これらは、この情報のみでは判断できないので、後述することとし、残る4点について検討したい。

・ヤマガラ【3250】には「十八年四月廿日 ♂、函館」とある。採集年次から見ても標本群Cに含むべきものである。他にラベル7が付属する。

・ツツドリ【3614】には「亀田郡亀田村、丈壺尺〇八分、羽六寸四分、十九年九月廿七日、長嶺護通献」とある。これも標本群Cに含むべきものである。他にラベル7・8が付属する。

・ヤマゲラ【3670】には「函館、明治廿四年十一月二日、渡辺」とある。採集年次、「渡辺」の記載からも標本群Cに含むべきものである。ラベル7が付属している。

・ヤマゲラ【3671】にも「函館、明治廿四年十一月二日、渡辺」とあり、ラベル7が付属している。これも標本群Cに含まれる。

4.7 ブラキストン標本として確定できない標本群

ここまでは、ラベルの記載から確認してきたが、残る87点にはブラキストン標本であるかどうかを見極める記載は残されていない。これ以降に見るものはブラキストン標本としての位置付けを与えることはできないが、各標本群に分類してみたい。

まず、ブラキストンから寄贈されてから、最も早くに付与されたと考えられるラベル4の付属状況についてみてみたい。このラベルが付属している標本群には混入はあまり見られないことから、明確な除外要因がない限り、標本群Aに含まれるものと考えてよい。87点中ラベル4を持つものは36点⁴⁷⁾である。いずれも除外要因はなく、すべて標本群Aに

含むこととする。この 36 点中、ラベル 2・3 などの採集データが付属していないにもかかわらず、採集から 30 年近く経過した時点で付与されたラベル 7 に採集データが記載されているものが 9 点⁴⁸含まれており、ラベル 2 が 1908 年頃には付属していたことを窺わせるが、ラベル 7 のデータに全幅の信頼を置くことはできず、標本群 A としなければならない。

残る 51 点のうち、カササギ【3760】のみは分類番号が記載されているラベル 5 が付属するが、これのみでは標本群 B に含めざるを得ない。

残る 50 点にはすべてラベル 7 が付属し、うち 20 点にラベル 8 が付属する。その他のラベルは付属していない。50 点中、ラベル 7 に採集データを有するものが 7 点⁴⁹あり、これらにはラベル 2 などが 1908 年頃まで付属していた可能性もあるが、ラベルの痕跡もなく、また、ラベル 7 のデータには信頼に欠ける部分もあり、裏付けとなる根拠に乏しい。データを有する標本のうち、ベニヒワ【3477】は「函館、1891.11」という記載があり、これは標本群 C に含むべきものである。残り 49 点中には、ブラキストンの剥製製作法といわれる腹部を縫合していないものもあり、ブラキストン標本としてみなしうる可能性にあるが、ラベルの付属状況から検討している本稿においてはこれらすべてを標本群 B に含めざるを得ない。

以上、ラベルの付属状況から、ブラキストン標本と考えられてきた標本群を分類してきた。ここで、その分類の結果明らかとした点数と、ラベルの付属状況を一覧にしてみたい。(表中の数字はラベル及び付属の痕跡のある標本点数)

	点数	ラベル 2・3	ラベル 4	ラベル 5	ラベル 6	ラベル 7	ラベル 8	その他
BL 標本	1190	1172	1162	410	131	895	197	126
標本群 A	48	0	48	14	0	38	7	4
標本群 B	60	0	0	3	4	52	20	5
標本群 C	45	0	2	9	8	39	11	6
計	1343	1172	1212	436	143	1024	235	141

再度確認しておく、ラベル 4 付属のうち、標本群 C に含まれる 2 点は、2 章 4 節で確認したキセキレイ【3137】及びミヤマカケス【3325】である。この 2 点のラベル 4 は、誤って付与されたものと見なした。

ラベル 5 付属のうち、標本群 B に含まれる 3 点は、分類番号の記されたコクマルガラス【3045】、カササギ【3769】及びトキ【4240】である。これらはブラキストンの付与したと考えられるラベル 2・3 及び早い時期に付与されたと考えられるラベル 4 がなかったために標本群 B とした。標本群 C に含まれる 9 点のうち、オオバン【4161】及びウズラ【4191】には分類番号が記載されているが、別に付属するラベル 5 もしくは分類できないラベルによってブラキストン標本でないことは明らかである。残りの 7 点はすべてラベル 5 あるいは分類できないラベルに、ブラキストン以外の採集者もしくはブラキストン離日以降の採集日の記載がある。

ラベル 6 付属で標本群 B としたものは、『採集日記』の類別番号と合致する番号をラベル 6 に持つものの、ブラキストン由来のラベルもしくはラベル 4 を有していないことから、混入の可能性があると考えたヒヨドリ【3289】、タヒバリ【3573】、ヒメウ【4105】、トキ【4240】である。

おわりに

以上のように、ブラキストン標本と見なしうるものは 1200 点を下回ることになった。可能性のあるものを含めても 1250 点にも満たない。しかし、北大植物園に移管された資料そのものの点数が 1300 点を下回っていたという事実を考えれば、ほぼ妥当な残存状況といえるのではないだろうか。もちろん、博物館施設であれば収蔵されている資料は、適正に管理され、1 点たりとも紛失してはならないのであるが、現在の博物館の理念を 100 年以上前の博物館に当てはめることは妥当ではないだろう。過去の管理方法を問題視することよりも、現時点で明らかとなっている、より適正な情報に基づいて管理を実施してゆくことが求められよう。その際に、混乱した情報を切り捨てるのではなく、その混乱も現在残されている資料群の歴史として適切に保管されることこそが重要である。

本稿においては、ラベルの付属状況、記載事項に基づいた分類を実施しており、この分類が完璧なものであるとは考えていない。今回重視しなかった剥製の製作方法などを考えると、標本群 B とした中にもブラキストン標本と共通に見られる製作方法が用いられているものが含まれる。また、ブラキストン標本とした中にも、これまで存在しないとされてきた本剥製がある。これらについては今後の検討課題としたいが、ブラキストンの剥製製作法が記録されているわけではな

く、今回検討した結果と照合しながら調査を行うことになろう。その意味で本稿が今後のブラキストン標本研究の指針となるものと考えている。

本稿の執筆にあたっては、国立科学博物館西海功氏、山階鳥類研究所平岡考氏、市立函館博物館長谷部一弘氏、佐藤理夫氏、北海道開拓記念館三浦泰之氏、山田伸一氏には、資料提供および文献の閲覧、関連調査にかかわる助言をいただいた。また、北海道立文書館、北海道立図書館、市立函館図書館には資料の閲覧に際して多大な便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表する次第である。

本稿は、平成13年度科学研究費補助金（奨励研究B）、課題名「ブラキストン線設定の鳥標本の一部目録の再作成と福士家の鳥標本との関連性の解明」（申請者 市川秀雄、課題番号13918001）に基づく調査の成果の一部である。

¹ 現在の北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園内博物館の名称は時代ごとに変化しており、引用する文献によって表記が異なっている。本稿においては表記を統一して北大植物園とし、括弧内に当時の施設名を併記するが、引用文中においては原文のまま記載してある。過去における名称としては札幌博物館（開拓使、農商務省北海道事業管理局）、札幌農学校所属博物館（札幌農学校）、札幌博物館（東北帝国大学農科大学）、北海道大学農学部附属博物館、北海道大学農学部博物館（北海道大学農学部）などである（括弧内は所属）。

² 所在不明2点を含む。

³ 北海道立文書館所蔵簿書4082、函館支庁勸業係「明治十二年ヨリ十三年マデ 函館博物館書類」。

⁴ 大蔵省編『開拓使事業報告』第2編、479～480頁。

⁵ 山階他（1932）、犬飼（1943）、弥永（1979）など。

⁶ 前掲注（3）。下線部は引用者、以下同じ。

⁷ 中略部分に札幌博物館とあり、北海道大学農学部博物館をさす。

⁸ 山階他（1932）261頁、犬飼執筆部分。

⁹ 山階他（1932）216頁、山階・名取執筆部分。

¹⁰ 加藤 克「史料紹介『札幌農学校所属博物館採集日記』（『北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園紀要』第2号、2002年）。

¹¹ 『北海タイムス』、1908（明治41）年10月16日付記事。

¹² 管理番号0008-58123-5004。

¹³ 『函館毎日新聞』、1911（明治44）年1月10日付記事切抜。

¹⁴ 「博物一式」（稿本、犬飼哲夫旧蔵）、関他（1990）注111参照。

¹⁵ 高倉他（1986）。

¹⁶ 加藤は北大植物園所蔵の資料のラベルの皆悉調査を継続的に実施しており、個別の資料群ごとのラベル番号を付与してはいない。旧稿「折居彪二郎採集標本の歴史的検討」（『北海道大学農学部博物館研究紀要』、第1号、2001年）では加藤の調査に基づいたラベル番号に従って検討を進めたが、本稿では関連するラベルの番号があまりに離れすぎることによって理解を妨げる恐れがあるため、加藤の分類番号ではなく、ブラキストン標本群におけるラベル番号として付与した。

¹⁷ コゲラ【3667】はラベル2及びラベル3がともに付属しているが、管理番号と考えられる数字はラベル3にのみ記載されている。記載されている番号は後に見るようにラベル2とラベル3の過渡期にあたり、ラベル2がメモ代わりに利用されたものと考えておく。なお、本稿において【 】で括った数字は、現在の北大植物園博物標本管理分野の標本番号を示す。

トラツグミ【3313】にはラベル2が2枚付属しており、1枚は「2354、Sapporo、19th Aug 1877」、1枚は「1102、Hakodadi Japan ♂、March」とある。前者は標本の脚部をまとめるのにも利用されており、より信頼のおけるラベルと考えられるため、本稿では前者のデータをとる。

¹⁸ 管理番号と標本の対照は目録（『北大植物園資料目録』、二号「ブラキストン標本」）付録参照。

¹⁹ 管理番号2238はメダイチドリ【3771】とムナグロ【3783】に重複して付与されている。この前後の管理番号を持つものはすべて東京産、1877年Pryer寄贈のものであり、整理の途中で重複したものと推測される。なお、この2点は表1の点数に加えてある。

²⁰ 標本番号NSM-A13412。

²¹ 標本番号NSM-A13345。

²² 標本番号NSM-A13732。

²³ 標本番号NSM-A14755。

²⁴ 標本番号NSM-A13412付属のラベル。

²⁵ 標本番号NSM-A13245、シマフクロウ（1892年10月20日採集）付属のラベル。

²⁶ 管理番号と標本の対照は目録（『北大植物園資料目録』、二号「ブラキストン標本」）付録参照。

²⁷ 以下の検討については、直接史料にあたるができなかったため、北島（1985）の記述によりながら論を進める。

²⁸ 現在も北大植物園収蔵庫内で利用している標本棚7から11がこれに該当する。

- 29 後述するように、現在ブラキストン標本とみなされている標本には明治 19 年ごろに採集されたものも含まれているが、これらにはラベル 4 は付属しておらず、ラベル 4 が点数確認のために付与されたという推測が妥当であるとすればおそらく前者の明治 17 年調査の際に付与された可能性が高い。
- 30 ハリオアマツバメ【3166】ではラベル 2 の紐の上にラベル 5 が結び付けられており、さらにその上にラベル 6 が結び付けられている。
- 31 『採集日記』では標本名に異名が記されていることがある。本稿では便宜上、『採集日記』標本名の項では現在一般に利用される種名で記載してある。その基準については『図説日本鳥類由来辞典』（菅原浩、柿澤亮三編著、柏書房、1993 年）を参照した。
- 32 『採集日記』類別番号 1911 番ケイマフリは、ウミガラス【4226】である可能性がある。これについては後述する。
- 33 村田については沖野（2000）参照。
- 34 これらの他にローマ数字とアラビア数字も記載されているが、この二つについてはその分類方針が現在のところ不明であり、本稿では取り扱わない。
- 35 目録の凡例及び採集データを参照。
- 36 北大植物園所蔵カメレオン【13174】（1901 年 12 月 18 日採集、有島氏寄贈）付属のこのラベルには、「2127」という番号が記載されている。この番号は『採集日記』の類別番号のカメレオンと合致（採集日は寄贈日が記されているのか異なっている。なお、この時期有島は入営中で、採集・寄贈が実際にこの時期に行われたのかは疑わしい）し、このラベルに記載されている番号が『採集日記』のものであるという考えを裏付ける。ただ、先にも触れたように犬飼・名取体制になった昭和初期には『採集日記』は利用されていなかったものと推測されるため、この類別番号が当時も利用されていたかは疑問である。この点については他の資料群とも照合しつつ、検討を重ねる必要があるが、現時点では名取が過去の管理番号を失わないために記載したものと考えておく。
- 37 このラベルは採集者のスノーが付与したものと考えている。
- 38 エナガ【3274】、センダイムシクイ【3551】、【3552】、【3554】、コシジロウミツバメ【3633】、ハヤブサ【4316】である。このうち、ハヤブサ【4316】の裏面には「武笠」の記載があり、1930 年代に博物館にかかわっていた武笠耕三の書き込みがある。
- 39 エゾアカゲラ【3651】。分類できないラベルに「Hakodadi Japan, August, ♂, Young」とある。「Hakodadi」の記載はラベル 2・3 に共通に見られるものである。
- 40 必ずしもすべてが仮剥製というわけではなく、ラベル 2 が付属するものであっても本剥製のものが存在する。
- 41 高倉他（1986）「VI ブラキストンの剥製法について」。
- 42 ヤマセミ【3031】、ハシブトガラス【3041】、ショウドウツバメ【3055】、カワガラス【3076】、ルリビタキ【3114】、ツグミ【3118】、キセキレイ【3137】、セグロセキレイ【3146】、カワセミ【3195】、モズ【3264】、ヒヨドリ【3288】、トラツグミ【3314】、マヒワ【3473】、ビンズイ【3575】、ツツドリ【3621】、カッコウ【3682】、タシギ【3795】、マガモ【4057】、エゾライチョウ【4154】、ヒクイナ【4169】、ヨシゴイ【4259】、カシラダカ【8182】。
- 43 ムナグロ【3781】に付属。
- 44 検討上除外対象としたものは 24 点になるが、キセキレイ【3137】は 2 章 4 節で検討しており、点数からは省く。
- 45 脚部をまとめる紐のしぼりかたなど。
- 46 「Yedo」の記載のあるものはキョウジョシギ【3944】、キリアイ【3971】、ナベヅル【4022】、ヤマドリ【4146】の 4 点である。これらはすべてラベル 2 に記載されている。
- 47 イワツバメ【3065】、ジョウビタキ【3088】、ノビタキ【3097】、ルリビタキ【3112】、ツグミ【3117】、ツグミ【3164】、カワセミ【3192】、ベニマシコ【3213】、シロハラゴジュウガラ【3226】、コガラ【3249】、キレンジャク【3258】、ニュウナイスズメ【3425】、ニュウナイスズメ【3430】、マヒワ【3474】、マヒワ【3475】、ビンズイ【3574】、ビンズイ【3591】、タヒバリ【3592】、ビンズイ【3602】、コゲラ【3668】、ムナグロ【3780】、ハマシギ【3822】、オグロシギ【3898】、クサシギ【3939】、トウネン【3951】、トウネン【3956】、アホウドリ【4046】、キンクロハジロ【4073】、ホオジロガモ【4077】、アカエリカイツブリ【4124】、カイツブリ【4128】、ヒクイナ【4168】、ヒクイナ【4192】、ハヤブサ【4269】、クマタカ【4297】、ノビタキ【9017】。
- 48 コガラ【3249】、ビンズイ【3591】、タヒバリ【3592】、オグロシギ【3898】、アホウドリ【4046】、キンクロハジロ【4073】、ホオジロガモ【4077】、ハヤブサ【4279】。
- 49 オオマシコ【3221】、ベニヒワ【3477】、タヒバリ【3565】、タヒバリ【3571】、ビンズイ【3610】、シジュウカラ【3750】、シノリガモ【4031】。

（引用・参考文献）

- T.W.Blakiston & H.Pryer (1878) : 「A Catalogue of the Birds of Japan」 (『Ibis』 pp209-250)
- T.W.Blakiston & H.Pryer (1882) : 「Catalogue of the Birds of Japan」 (『Trans. Asiatic Society Japan』 pp84-186)
- T.W.Blakiston (1883) : 「Zoological Indications of ancient connection of the Japan Islands with the Continents」 (『Trans. Asiatic Society Japan』 pp126-140)
- T.W.Blakiston (1884) : 「Amended List of the Birds of Japan According to Geographical Distribution」、Taylor &

Francis, London

Seebohm (1890) : 『The Birds of the Japanese Empire』、R.H.Porter, London

犬飼哲夫 (1943) : 『北の風土と動物』、北方文化出版社

犬飼哲夫 (1981) : 「ブラキストン大尉」 (『採集と飼育』 43 巻 5 号)

上野益三 (1968) : 『お雇い外国人 3—自然科学』、鹿島研究所出版会

沖野慎二 (1999) : 「北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料 (上)」 (『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 第 5 号)

沖野慎二 (2000) : 「北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料 (中)」 (『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 第 6 号)

北島佐一郎 (1985) : 「ブラキストンについて」 (『こくがん』 日本野鳥の会函館支部創立 5 周年記念誌)

木原均他監修 (1988) : 『近代日本生物学者小伝』、平河出版社、T・W・ブラキストンの項、および八田三郎の項、共に犬飼哲夫執筆

関秀志、中田幹雄、千代肇 (1990) : 「明治期における北海道の博物館 (1)」 (『北海道開拓記念館調査報告』 第 29 号)

高倉新一郎・関秀志・笹木義友・門崎允昭 (1986) : 「幕末維新时期における欧米科学技術の摂取について—福士成豊を中心に—」 (『北海道開拓記念館研究年報』 第 14 号)

芳賀良一 (1958) : 「博物館の動物標本—その歴史—」 (『北大季刊』 第 15 号)

八田三郎・村田庄次郎 (1906) : 「北海道産鳥類目録」 (『札幌博物学会会報』 第 1 号)

森樊須 (1986) : 「ブラキストンの鳥類コレクション」 (『北大時報』 392 号)

谷津直秀 (1908) : 「北海道の鳥学」 (『動物学雑誌』 240 号雑録)

彌永芳子 (1979) : 「トーマス・W・ブラキストン伝」 (『蝦夷地の中の日本』、八木書店)

山階芳麿、犬飼哲夫、名取武光 (1932) : 「A List of Birds' Skins Presented by Captain BLAKISTON in the University Museum of Natural History of Sapporo with a Brief Account of His Life in Hokkaido」 (『札幌博物学会会報』、12 巻 4 号)

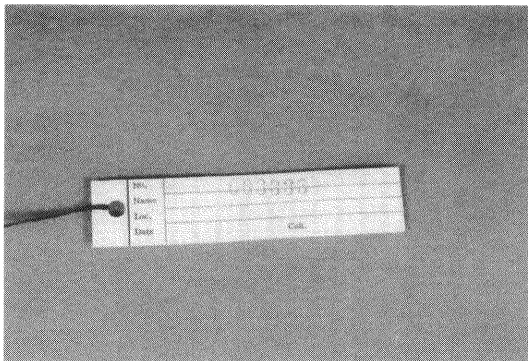


写真 1

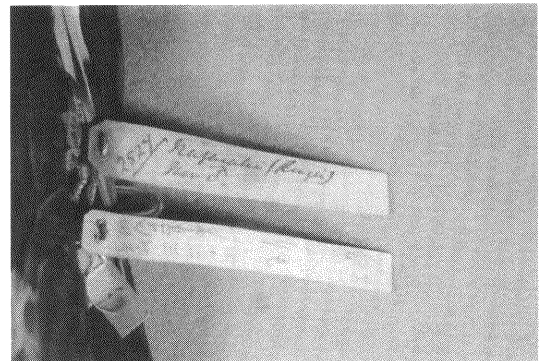


写真 2

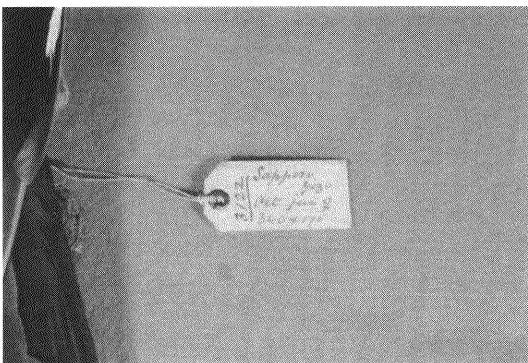


写真 3

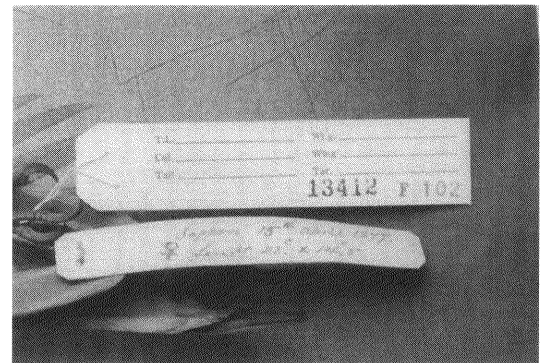


写真 4

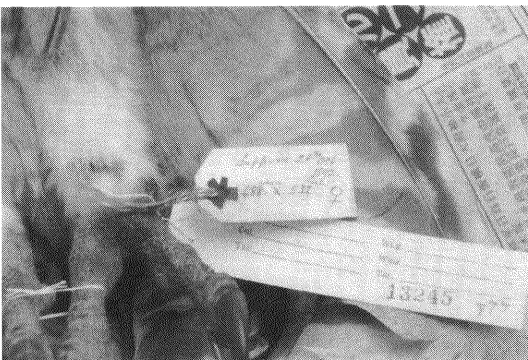


写真 5

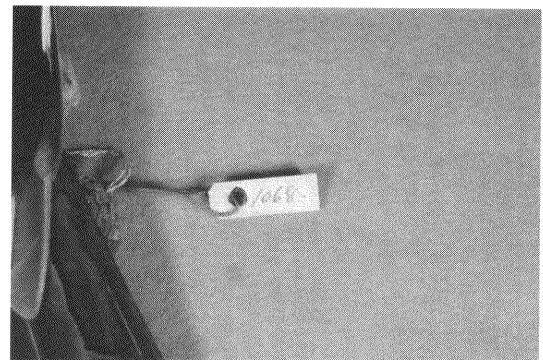


写真 6

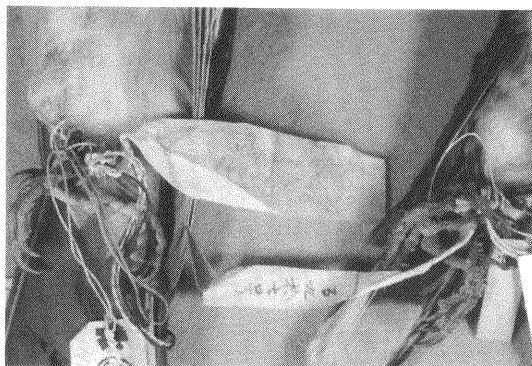


写真7

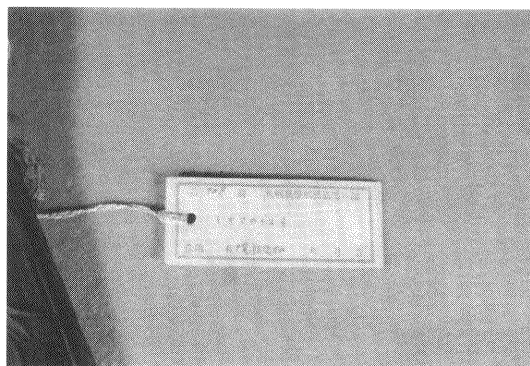


写真8

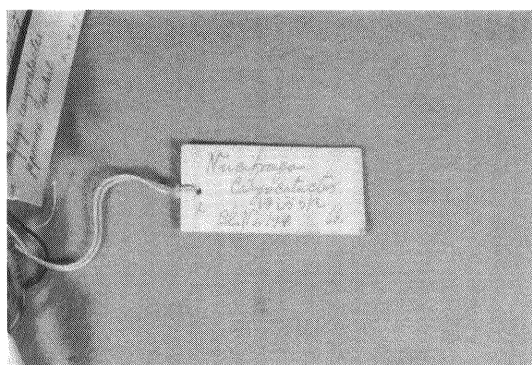


写真9

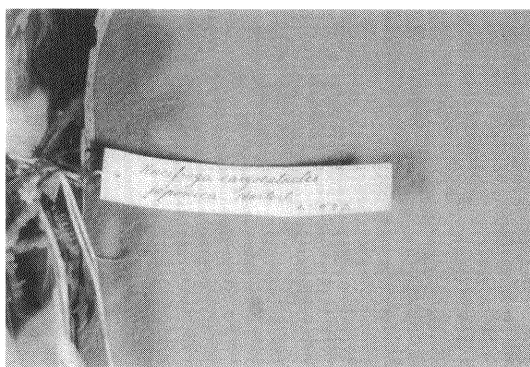


写真10



写真11

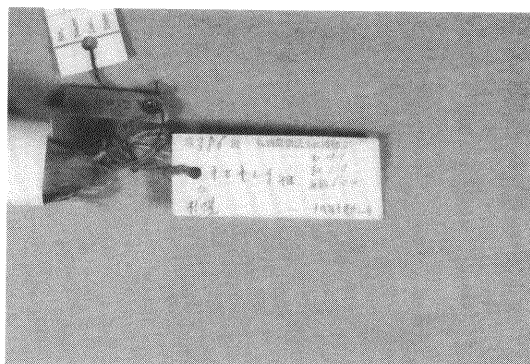


写真12